

古地図にあらわれたマラッカ

—— その出現とポルトガル・オランダ支配期の都市図 ——

船 越 昭 生

Malacca appearing in old maps

—— maps of the town during the Portuguese-Dutch ages ——

by

Akio FUNAKOSHI

は し が き

現在マラヤとよばれている土地は19世紀中頃まで、共通の呼称を欠いていた。マレー人は“*tanah Mēlayu*”という呼称を有してはいたが、これはジャワ・スマトラ・ボルネオまでをもふくむ広範囲を示すものであった。イギリスがこの半島に進出してから、半島の呼称を必要としはじめてはいた¹⁾が、19世紀中頃にはヨーロッパにおいてなお“マラッカの半島”という古いよび名がはるかに親しまれた名称であった。²⁾

それは、15世紀以後、ヨーロッパでプトレマイオスの地図が復活してから、この半島をもってプトレマイオス図東端の *Aurea Chersonesus* にあてる見解があり、またこれとともに16世紀初頭、ポルトガルがインドに進出するや、マラッカ王国の繁栄を聞きつたえたヨーロッパ人はこのプトレマイオス図の *Aurea Chersonesus* の輪郭の半島上にマラッカの地名を記すものが出現したことに始まる。さらにまたアラビア人パイロットからインド洋のかなたのマラッカの存在を教わり、巨大で異様な輪郭をもつマレー半島を描いてマラッカの地名を記入したのも作られて、これらが重視され、継承されたことにもよる。

マラッカの町は16世紀初頭、ポルトガルによって占領され、その貿易上占める位置の重要性のために世界の注目を集めた。マラッカの支配権はその後、17世紀にはオランダに移ったが、ポルトガル支配以後、マラッカの名称は単なる港や町の名称だけでなく、半島全体を示す名称

1) R. O. Winstedt, *Malaya and its History*, London, 1953, p. 8.

2) Winstedt は19世紀まで全半島に対するいかなる名称も存在しなかったと述べているが、現存の16, 17, 18世紀の地図にはマレー半島そのものに対してもマラッカの地名を記すものが少なくない。

としても用いられていたのである。

本稿の目的はまず大航海時代の世界図や海図その他の広域地図のなかにマラッカ地名を求めて、その地図の性格や作成時の状況を探り、またマラッカの港や町をあらわす古地図から要塞や市街の状況を明らかにするにある。ただ筆者の身近にある限られた資料だけに頼ったため、欠漏したものもあると思われるが、この小編がマラッカ古地図研究のささやかな踏石ともなれば幸いである。

I ヨーロッパ古地図におけるマラッカの出現

15世紀末から16世紀初頭において南海で活発な活動を行なったのはポルトガル人であった。地理学におけるルネサンスは、プトレマイオスの復活であるといわれるが³⁾、ポルトガル人もたらした南海の知識は新大陸に関するそれとともに、生きかえったプトレマイオスの地図を修正していった。この時期の地図の特徴は、アフリカ沿岸の地名が、しだいに詳密となり、刻々と南下航海され、回航される事情が手にとるように示されるし、新大陸の東岸の輪郭が、まるで“あぶり出し”のように大西洋をこえたところに現われる。やがてインドが、幻の彼方ら忽然と出現し、インド洋の輪郭がおぼろげながらできていく。

1960年にヘンリー航海王を記念して、リスボンで出版された *Portogaliae Monumenta Cartographica* (P.M.C. と略す) 5 Vols. はこの時代にポルトガル人によって作成されたすべての地図を含む folio 版の巨冊で、A. Cortesão と A. Teixeira da Mota の編に成り、懇切な書誌が付せられている。この地図集成のなかで、最初にマラッカ地名を記す地図を探すならば、1502年頃の作成と目せられるいわゆる“Cantinoの地図”がまずあげられねばならない。一方1897年ストックホルムで出版された A. E. Nordenskiöld の *Periplus* は広く諸民族の主要古地図を集めた古典的な地理学史地図帳で、1492年から1561年にいたるアジアに関する地図資料の書誌が収められている。⁴⁾ いまこの南海関係図100余種のなかから、マラッカ地名を有する最初の地図を探すならば、前述した Albert Cantino の地図のほかに、さらにもう一つ Dr. Hamy 蔵(当時)の一世界図が見出される。これもまた1502年頃の作成とされるもので、Vasco da Gama のインド到着直後の時期とされる。前者は *Portogaliae Monumenta Cartographica* に、後者は *Periplus* に大きく複製されているので、これによる研究が可能となっている。以下、この地図をはじめ、マラッカ地名を記載する初期の広域地図や海図の目録を書きつらねる。

〔マラッカ地名の記載される16世紀初頭の主要な広域図〕

1. Anon. — A. Cantino, no title, planisphere, ca. 1502, Biblioteca Estense, Modena,

3) R. A. Skelton, *Decorative Printed Maps of the 15th to 18th Centuries*, London, 1952, p. 35.

4) A. E. Nordenskiöld, *Periplus*, 1897, pp. 149-161.

- 105.0×220.0 cm. (*P.M.C.* plate 4, 5)
2. Anon., no title, world map, ca. 1502, Huntington Library, San Marino, California, 94.0×59.0 cm. (*Periplus* XLV)
 3. Johannes Ruysch, “Universalior Cognibi Orbis tabula ex recentibus confecta observationibus,” ca. 1508, in Ptolemy’s Atlas, Rome 1507, 1508. (*Facsimil Atlas* XXXII)
 4. Anon. — Jorge Reinel, no title, chart, ca. 1510, Herzog August Bibliothek, Wolfenbüttel, 114.5×160.0 cm. (*P.M.C.* plate 9)
 5. Francisco Rodrigues, no title, chart, ca. 1513, Bibliothèque de la Chambre des Députés, Paris, 26.3×37.7 cm. (*P.M.C.* plate 35, VII)
 6. Anon. — Pedro Reinel, no title, chart, ca. 1517, formerly Armebibliothek, München, 68.0×131.0 cm. (*P.M.C.* plate 10)
 7. Anon. — Pedro Reinel, no title, chart, ca. 1518, British Museum, London, 69.8×103.0 cm. (*P.M.C.* plate 11)

II “Cantino 図” と “Hamy 図”

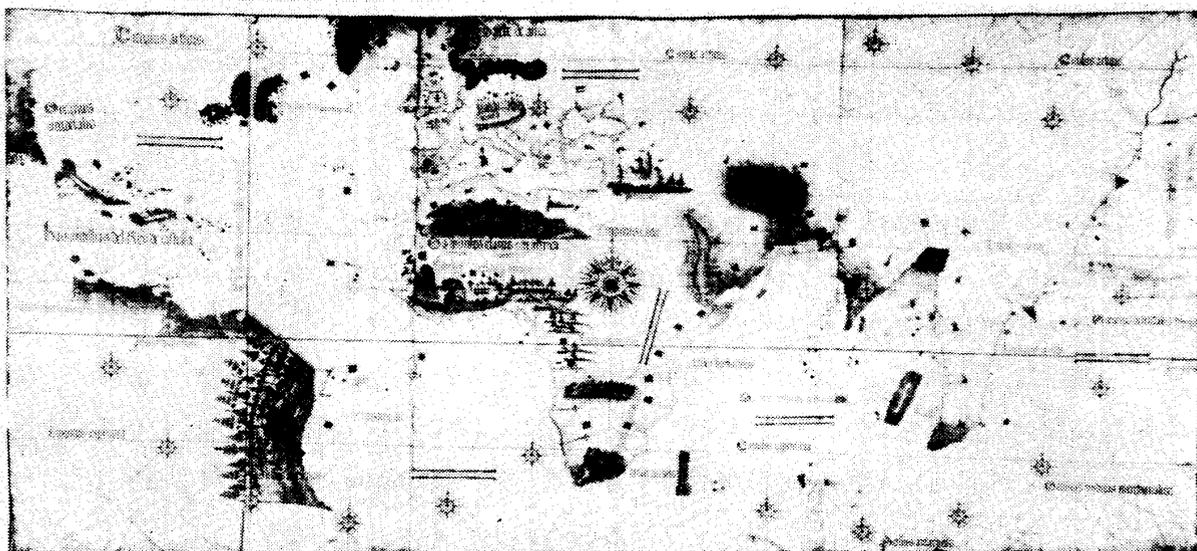
目録1の“Cantino 図”は羊皮紙に着色された美しい写本(105.0×220.0 cm)で現在 Modena の Biblioteca Estense に蔵せられる。縮尺およそ 12, 820, 000分の1。この地図の作成過程およびその資料については従来種々の説が行なわれていたが、現在ではポルトガル人がポルトガルの資料によって描いたとする説に傾いている。⁵⁾ しかしこの図の資料となった地図には新大陸に関する Columbus や Vespucci などイタリアの資料が用いられていることは歴然としており、資料におけるポルトガル資料への完全依存という説は全面的には容認し得ないと思われる。この地図の作成者 A. Cantino は Ferrara 侯の命をうけてリスボンに赴き、ポルトガル人の探検・航海の記録を収集した人物である。⁶⁾ 作成年不明のこの地図が、なぜ1502年の作成時期が与えられるかはつぎの事情による。*P. M. C.* の編者によれば、João da Nova が、1501~02年に行なったインドへの航海の途次発見された Ascension 島がこの地図のなかに記入されており、この発見の報告が1502年9月、おりしも Cantino が滞在していたリスボンに到着している点、またその時行なわれていた1501~02年にわたるポルトガルのブラジルへの探検航海の成果がこの地図に反映されていない点などが根拠となって1502年という作成年が与えられている。⁷⁾

この地図はヨーロッパ地図学史上きわめて重要な地図とされている。それはこの地図が

5) A. Cortesão e A. Teixeira da Mota, *Portogaliae Monumenta Cartographica*, Lisboa, 1960 (*P. M. C.* と略す), Vol. I. pp. 8 ff.

6) *Ibid.*, p. 8.

7) *Ibid.*, pp. 9-11.



全 図



部分図

写真1 広域図目録1 Anon.—A. Cantino, no title, planisphere, ca. 1502, Biblioteca Estense, Modena.

Waldscemüller の地図などと同様、大西洋のかなたに新大陸の一部を描く一方で、正確をきわめたアフリカ大陸の輪郭と、かつてみないインド洋方面の新知識を同居させて、中部・南部アメリカの一角を描くとともにインド洋の東端に巨大な半島を南下させ、その先端に“Malaqua”の地名が書き入れられていることによる。つまり、アメリカを新大陸というならば、インド東方一帯もまたヨーロッパ人にとって新しい天地の一部でなければならなかったわけで、大航海時代の視圏拡大の状況を明瞭に反映しているからである。

インド洋沿岸一帯の記載におけるこの地図の特色は、1) アフリカが正確に描かれ、2) ポルトガルの占領地には方形の旗印が示され、3) Diogo Cão, Bartholomeu Diaz, Vasco da Gama, Pedro A'lvares などの探検のあとを残している。4) 東方ではペルシャ湾付近の描法および地名にプトレマイオス図の影響が残っているが、5) Magnus Sinus の大湾は消滅し、インド半

島の輪郭は正確となっている。また 6) マレー半島は過大に表現され、7) スマトラおよびマダガスカル島はいくぶん位置の正確さを失っている。これらの諸要素を判断すると、この地図は明らかにポルトガルがマラッカを占領する以前の時期に属し、まだ実際にマラッカを訪れたポルトガル人はなく、おそらく Gama や Cabral の水先案内がイスラム教徒であったことから考えて、その陸地の輪郭・緯度・距離の表現などいずれもイスラム教徒の資料を反映していると推定せられる。またアメリカについていえば、La Cosa のごとき、イスパニア人の知識が前述のイタリア人の知識とともに存在していることも疑いえない。

赤道・回帰線・極圏、それに二つの Wind rose をもったこのポルトラノは、まさに大航海時代初期の発見の成果を如実に示すものであった。この図の東端、南半球にまで南下する巨大な半島の南緯 15° 付近、最南の河川が西流するところに“Malaqua”の地名が付せられていた。すでにスマトラは記載されていたがジャワはもちろんボルネオも記されていない。そして、このマラッカ地名の近くにはつぎのような inscription が付せられていた。

マラッカ——この都市にはカリカットに向かうすべての商品がある。丁字・安息香・沈香・白檀・蘇合・大黃・象牙・大きな価値のある宝石・真珠・麝香・美しい陶器・そのほか多量の商品が認められる。その〔商品の〕多くは、他所つまりシナの国から来る。

たしかに鄭和の航海〔最終第7次は1433年に帰着〕以後、中国では陶器工業が栄え、資本制生産への移行が急速に行なわれたとする論者もあり⁸⁾、時代はやや降るが、「大明會典」の抽税則令中の貿易品の対価中、高価で需要の多い品物として陶器があげられている⁹⁾ことを思えば、この inscription の記載はあながち荒唐無稽ではない。しかし、丁字・安息香・白檀・象牙などをもって、中国からもたらされたとするのは誤りで、安息香が西アジアの特産であるのを除いて、他は広く東南アジア一帯に産するもので¹⁰⁾、たしかに中国船の運び去り運び来る物資のなかにこれら物産が存在したことは事実であり、マラッカが、中国・東南アジア・インド・西アジア一帯など広範な地域からもたらされる物資集散の中心地であったことを物語っている。ポルトガルの進出が、マラッカ占領後、ただちにモルッカ諸島および中国に達するのは、この二つのルートが同時に東からマラッカへ入ってくる物資移入のルートでもあったことを示している。

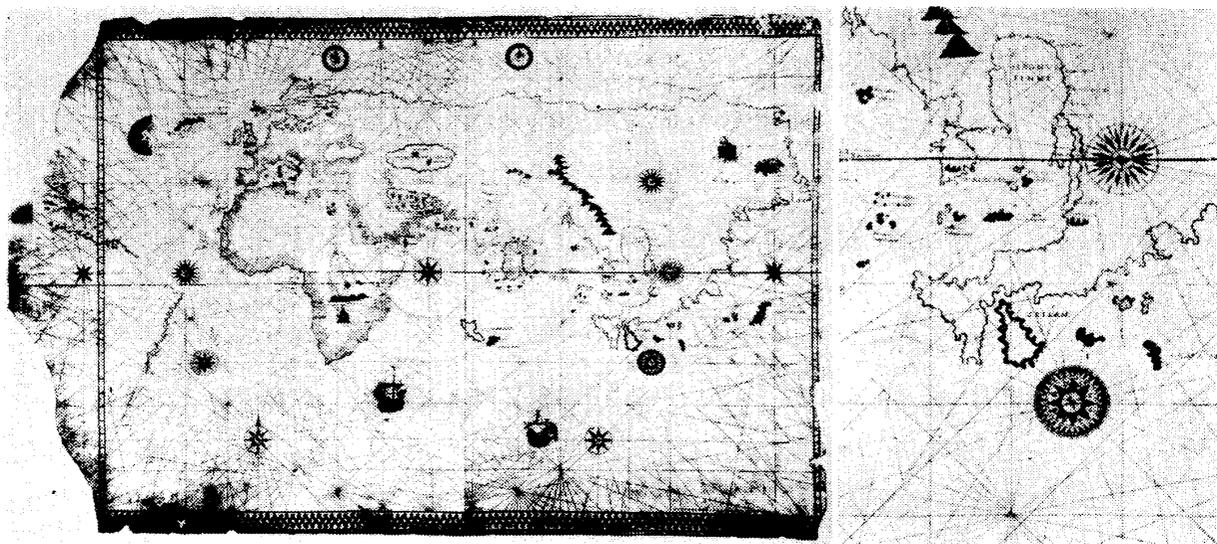
つぎに同じく 1502年頃とされる目録 2 に示した *Periplus* 所収の一世界図は羊皮紙の写本 (94.0×59.0 cm) の地図で、現在カリフォルニアの San Marino にある Huntington Library に所蔵されている。¹¹⁾ この地図は以前、パリの Dr. E. T. Hamy の所有していたことによって

8) 朱傑『鄭和』北京, 1956, pp. 100-104.

9) 韓槐準『南洋遺留的中国古外銷陶瓷』新加坡, 1959, pp. 15-21.

10) 馮承鈞校注, 趙汝适『諸蕃志校注』上海, 1940. F. Hirth & W. W. Rockhill (translated from the Chinese and annotated), *Chau Ju-Kua*, St. Petersburg, 1911.

11) R. A. Skelton (revised and enlarged), *Leo Bagrow's History of Cartography*, London, 1964. に最近の所蔵者名が記されている。



全 図

部分図

写真2 広域図目録2 Anon., no title, world map, ca. 1502, Huntington Library, San Marino, California.

“Hamy の地図”ともよばれ、また Hamy のさらに前の所蔵者 Richard King の名にちなんで “King の海図”ともよばれている。署名も日付も記されていないが、1887年に Hamy が発表した論文で与えたほぼ1502年という作成時期を Nordenskiöld も承認している。¹²⁾ アフリカは正確に描かれ、南アジアにおける Vasco da Gama の航海直後の状況が示される。ヨーロッパ、アフリカの輪郭はほとんど現在の地図とかわらず、新大陸は西インド諸島、南アメリカの一角がわずかに出現している。この図の東部ではインドは東西二つの半島にわかれ、図の東端には二つの半島が南下している。ヨーロッパ・アフリカ部分と、新大陸ともいうべきアジア部分のコントラストはきわめて顕著で、ことにインド以東は、15世紀以来、盛行をきわめたプトレマイオス図の影響をはっきりと示している。つまりヨーロッパ・アフリカ部分の正確さと、アジア部分におけるプトレマイオス地図系の優越という奇妙な対比がこの地図の特色となっている。そして、“Malacha”という地名が記されている半島には、また “Tacola” というプトレマイオス地図系の地名を伴っていることから、これが “Aurea Chersonesus” であることは明らかである。つまり、実証的な知識によるプトレマイオスの地理像の修改といえるのである。ヨーロッパにおけるマラッカの認識は、航海者の伝聞による地理像、さらにはプトレマイオス図と航海者による伝聞という二重の地理像、この2種類のものが存したわけである。Cantino 図、Hamy 図こそ、マラッカ地名を記す現存最古のヨーロッパ製地図なのである。

また目録3の Johannes Ruysch の “Universalior Cognibi Orbis tabula ex recentibus

12) A. E. Nordenskiöld, *op. cit.*, p. 128, p. 149.

A. Hamy, “Notice sur une mappemonde portugaise anonyme de 1502, récemment découverte à Londres,” *Bull. de géogr. hist. et descr.* 1886, Paris, 1887, p. 147.

confecta observationibus”は1508年頃の作成と考えられているもので、特殊な投影法によって描かれたプトレマイオス系の地名の散見する地図である。

これらについて、目録4の Jorge Reinel の1510年前後と目せられる地図がある。この図はマレー半島を南端だけしか示さないが、“Malaca”の地名と都市の記号が描かれ、

われわれが知ってもいなければ、かつて発見したこともない人口が多く、優雅で豊かなマラッカ

という期待に富んだ inscription が付記されている。さらに、マラッカ占領後を示すものとして、目録6の Pedro Reinel (ca. 1517) の地図があって、占領を示す方形と三角形の旗を“Malaca”の位置に描いている。また、目録7の同じく Pedro Reinel の1518年前後の地図もさらにポルトガルの占領地域の拡大を示している。Reinel の地図の大きな特色は香料諸島を描いている点である。ところで、香料諸島はすでにマラッカ占領直後、1513年の地図に出現している。それは目録5の1513年作とされる Francisco Rodrigues の図帳で、アフリカ西岸からインド沿岸一帯・香料諸島・中国・日本にまでおよぶ広範な海域の海図である。マレー半島はこの第34葉に示され、Sangapura, Rio Firrosa, Muarfl. Rio de Melka などの名がみえる。彼は D'Abulquelque とともにマラッカに來航し、マラッカより中国に使節として派遣された Tomé Pires 一行を送って広州へ行ったこともあるすぐれたパイロットで、著名な作図家でもあった。図の内容にはイスラム教徒の海図の知識はもとより、ジャワ人・中国人の水路についての知識も記載される¹³⁾ 南海水路志であった。

III マラッカ都市図のあらまし

マラッカという地名は大航海時代におけるインド東方の新発見を象徴する地名としてヨーロッパにおいてはきわめて重視されていた。それが半島をあらわすにせよ、町や港を示すにせよ、そのもつ何か重要な意義がたしかに存在していたことには疑いない。この重要性の中心をなすものが、マラッカの名称の起源そのものであるとする論者もある¹⁴⁾ほどで、それは商業貿易機能にもとづく東方の中継地点としての役割であったに相違ない。そして、16世紀初頭にはまだ西洋の地図上にぼんやりとしか表現されていないけれども、その背後に、モルッカ諸島や中国へ連絡する海上の道が隠されていた。すでに15世紀前半には鄭和の率いる大艦隊が入港し、大規模な物資の交易を行ない、マレー人の国マラッカ王国を冊封していた。東から西へ、

13) P. M. C., p. 84.

14) マラッカの地名起源に関してはいくつかの伝承があるが、その主なものはスジャラ・マラユ第18年代記にみえるアラビア語 malakat (すべての商人の集合場) より由来するとする説、またイスカンダルシャーと“マラカ樹にまつわる伝説”、およびジャワ語(大きな港)よりきた言葉とする説など種々伝存している。

そして西から東へ、南海を往来するすべての船が必ず通らねばならない位置、それがマラッカであった。

このマラッカへ、ヨーロッパ勢力が侵入し、マラッカの主権を手中に収めたとき、この町はどのような変貌をとげたのだろうか。これを示す現存の地図は必ずしも多くはないが、収集した資料から、その景観を古地図の上に追うことを試みることは必ずしも無意味ではあるまい。現存の古地図は16世紀前半から18世紀末までにおよぶが、なかでもポルトガル支配時代のものが多数を占めている。オランダ時代の要塞については、かつての資料をもとに作成された二次的な古地図が数種あり、これらに即して研究を進めるつもりである。いま手元にある地図はマラッカの市街・要塞に関する古地図および資料図15集があり、以下これを列記する。

〔Malacca 都市図〕

1. Gaspar Correia, no title, bird's eye view of Malacca town, ms., *Lendas da India*, 16 c., Arquivo Nacional da Torre do Tombo, Lisboa, 36.8×57.5 cm. (85*)
2. Gaspar Correia, no title, bird's eye view of Malacca town, printed, *Lendas da India*, reproduced 1858-1866, 16.0×31.0 cm. (86*)
3. Manuel Godinho de Erédia, "Plãta e forma do citio de Malaca," *Atlas de vinte folhas*, 1610, Biblioteca Nacional, Rio de Janeiro, 28.8×36.5 cm. (411 E*)
4. Manuel Godinho de Erédia, "Planta da cidade e povoacoens de Malaca," *Declaraçam de Malaca*, 1613, Bibliothèque Royale Bruxelles, 18.6×27.8 cm. (412 F*)
5. Manuel Godinho de Erédia, *Planta da cidade e povoacoens de Malaca*, reproduced by J. V. Mills, "Eredia's description of Malacca, Meridional India, and Cathy," *JMBRAS*, Vol. VIII, Plate 1, 1930, 35.5×47.5 cm.**
6. Manuel Godinho de Erédia, "Planta de fortificacam da cidade de Malaca," *Declaraçam de Malaca*, 1613, Bibliothèque Royale, Bruxelles, 18.6×27.8 cm. (412 G*)
7. Manuel Godinho de Erédia, "Planta da fortaleza de Malaca," *Declaraçam de Malaca*, Bibliothèque Royale, Bruxelles, 18.6×27.8 cm. (412 H*)
8. Anon.— Manuel Godinho de Erédia, "Taboa da planta forma da fortaleza de Malaca," *Atlas-Miscelânea*, ca. 1615-1622, collection of Dr. C. M. C. Machado Figueira, Lisboa, 27.5×20.0 cm. (417 D*)
9. Anon.— Manuel Godinho de Erédia, "Fortaleza de Malaca," *Atlas-Miscelânea*, ca. 1615-1622, collection of Dr. C. M. C. Machado Figueira, Lisboa, 27.5×20.0 cm. (421 D*)
10. João Teixeira, "Malaca na Aurea Chersonesso…," *Atlas de trinta e uma cartas*, 1630, Library of Congress, Washington, 11.2×15.1 cm. (472 A*)
11. João Teixeira, "Fortalez de Malaca," *Atlas com vinte e três mapas*, 16 c., Bayerische Staatsbibliothek, München, 19.5×28.0 cm. (512*)
12. Anon., no title, plan of Malacca, ms., *Livro do Estado da India oriental*, ca. 1635-1646, British Museum, London, 28.0×18.9 cm.**

13. P. A. Leupe, "Malakkas Grondteijckeningen 1656 en 1663," (Stukken betrekkelijk het beleg ende verovering van Malakka op de Portugezen in 1640-1641, Berigten van het Historisch Genootschap te Utrecht, 1859, p. 429), reproduced by Mac-Hacobian, "P. A. Leupe: The siege and capture of Malaka from the Portuguese in 1640-1641," *JMBRAS*, Vol. XIV, Part 1, 1936, 11.4×9.2 cm.**
14. P. Elias, "Hoofdplan van de stad en't kasteel Malacca," ca. 1792 (in J. C. Overvoorde, "Eene niet gepubliceerde Kaart van de belegering van Malaka in 1640-1641," *Tijds. Ind. Taal., Landen Volkenkunde*, LXVI, p. 617, 1926), reproduced by G. Irwin, "Malacca Fort," *Journal Southeast Asian History*, Vol. 3, No. 2, p. 43, 1962, 11.5×13.0 cm.**
15. Anon., "Dutch map of Malacca town," before ca. 1800, reproduced in *The town and Malacca*, Singapore, 1924, 16.1×36.1 cm.**

* *Portogaliae Monumenta Cartographica (P. M. C.)*, plate number.

** reproduction の大きさを示す

IV マラッカ要塞の記載

前章のマラッカ市街図目録における要塞の記載は、大別、つぎの5グループにわけられる。すなわち〔A〕Gaspar Correia の *Lendas da India* 所収図。〔B〕Manuel Godinho de Erédia の *Declaração de Malaca* 所収図およびその系統のもの。〔C〕João Teixeira の *Atlas de trinta e uma cartas* 所収図。〔D〕Pedro Barreto de Resende, *Livro do Estado* 所収図。〔E〕P. A. Leupe および P. Elias 作成図などオランダ時代のもの。

〔Aグループ〕

Gaspar Correia は1495年に生まれ、17才でインドに渡り、Alfonso de Albuquerque の死後まで彼に仕え、以後インドの植民地行政官として留まった人物である。彼の著書 *Lendas da India* (4 Vols.) はその第2巻にマラッカ地図を収める。¹⁵⁾ 目録1, 2の無題とされるものがこの図で、それによると市街はマラッカ川をはさんで左岸と右岸に分かれ、横木（あるいは蔓）と杭とでつくられた柵によって背後を囲まれている。左岸河口寄りの地には長方形の要塞（以後古要塞と称す）が設けられ、この建物の北西側に四つの窓をもった塔が設けられている。このプランによると、マラッカ山 (Bukit Malacca) はなお防禦の対象とされていない。この丘はオランダ時代“聖パウロ丘”と呼ばれたが、ポルトガル時代には“聖母の丘”と呼ばれることが多かった。占領を示す Padrão はマラッカ山にほど近い海中に描いている。Correia はこの著作の大部分を1550年には書き終えてはいるが、第1巻には1561年に書いたと記し、さらに1563年にマラッカでふたたび手を入れたといわれるから¹⁶⁾、遅くとも1564年にはできあが

15) *P. M. C.*, p. 167, Plate 85 A, 86 A.

16) *Ibid.*, p. 167.

ったものと考えてよい。

〔Bグループ〕

Manuel Godinho de Erédiaの作成した一群の地図で、目録3の *Atlas de vinte folhas* 所収図および目録4, 5, 6, 7, 8, 9など *Declaração de Malaca* 所収図がこれにあたる。

Erédiaは1563年マラッカに生まれた。父はアラゴン貴族の血をひくポルトガル人、母はマカッサルのラジャ D. João de Supaの娘である。マラッカのイエズス会のコレギオに学び、さらに1575～77年にはゴアのセミナリオで文法・芸術・哲学・数学・科学を修め、1579年イエズス会に入会（1584年退会）、1623年5月（推定）に歿したという。¹⁷⁾

彼の地図の描き方はポルトガル流の海図風の描き方とはことなっていて、むしろオーソドックスな地図描法で、彼がリスボンに滞在していた当時、盛んに行なわれていた Vaz Dourado の図法の影響をほとんど受け容れて

いないことが注意せられる。¹⁸⁾ 彼が活動した17世紀初頭には、東南アジアにおいてはオランダの勢力が急速に拡大しつつあり、すでにバタビアはオランダの手中に落ちていた。*Declaração de Malaca* にみられるごとく、多くの要塞図が作られており、また丹念な周辺の大地域図が

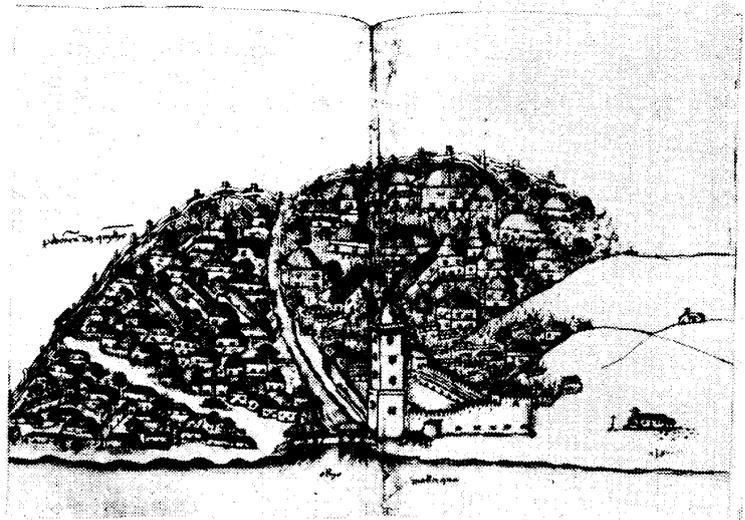


写真3 都市図目録1 Gaspar Correia, no title, bird's eye view of Malacca town, ms., *Lendas da Índia*, 16c., Arquivo Nacional da Torre do Tombo, Lisboa.

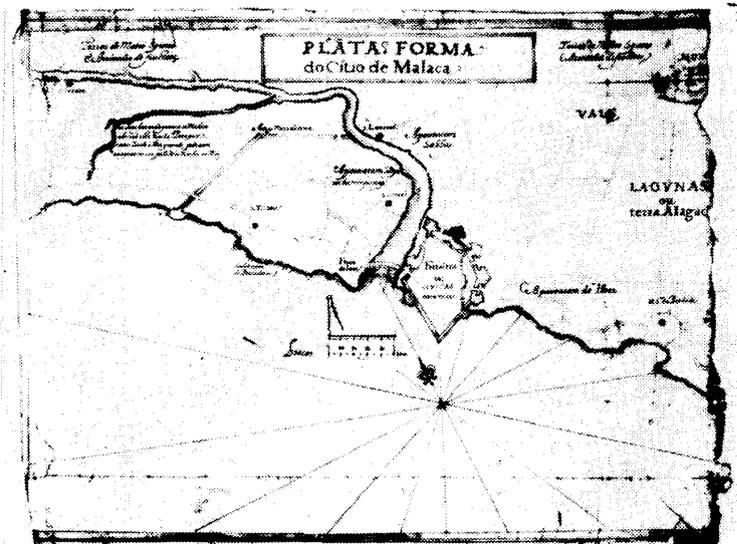


写真4 都市図目録3 Manuel Godinho de Erédia, "Plata e forma do citio de Malaca," *Atlas de vinte folhas*, 1610, Biblioteca Nacional, Rio de Janeiro.

17) *Ibid.*, p. 40.

18) *Ibid.*, p. 40.

つくられているのは、おそらくオランダの進攻を予測しての防禦作業のための製図でもあったと考えられる。彼はまた1604年に Muar 川河口左岸に一要塞を築いた。マラッカのそれに比べれば、いくぶん簡単なものであったが、マラッカ防禦の前哨線としてきわめて重要なものであった。

目録3 “Plãta e forma do citio de Malaca” は縮尺付の Malacca 市図、偏五角形の要塞で、北西部の城壁はほぼ南北方向に走っており、南西の突出部から沖に向かって 100 leaçacs の地点に方位の基準が置かれている。マラッカ川右岸には、町を囲んだ土壁がつくられ、海岸ぞいに北西に走る道路に対して入口があげられ、左岸の要塞城壁北東部には二重の囲郭がみられ外側のものには Nova Traca と記される。寺院のある“聖母の丘”は目録1、2の両図と異なり、すでに要塞の城壁によって囲まれており、前図と異なって、かなり広い地域を左岸一帯に占める一大要塞が出現したわけである。

目録4 “Planta da cidade e povoacoens de Malaca” は、前図と異なり、方位に関して、上を東、図底を西としており、“Nova Traca” とされる北東部外側の囲郭や要塞内の道路・地形が示され、また要塞周辺の河川・海岸・洲・道路などが比較的克明に記されている。右岸の市街もやはり障壁で囲まれている。なお目録5はその複製図である。

目録6 “Planta de fortificacam da cidade de Malaca” は前図のなかから要塞の部分のみをとりだしたものである。ただ前図と異なるところは、要塞からマラッカ川河口近くの橋へ道路が通じており、南東城壁においてもまた2箇所を Aerlelé川の2橋に通じている。“聖母の丘”上の寺院は描かれ、ここに至る四つの道路、城塞内北西部の古要塞も明らかに記されている。

目録7 “Planta da fortaleza de Malaca” は、文字通りマラッカ要塞の中心をなす古要塞の平面図である。縮尺が付せられ、長方形の建築物に加うるに塔が建物南西端に

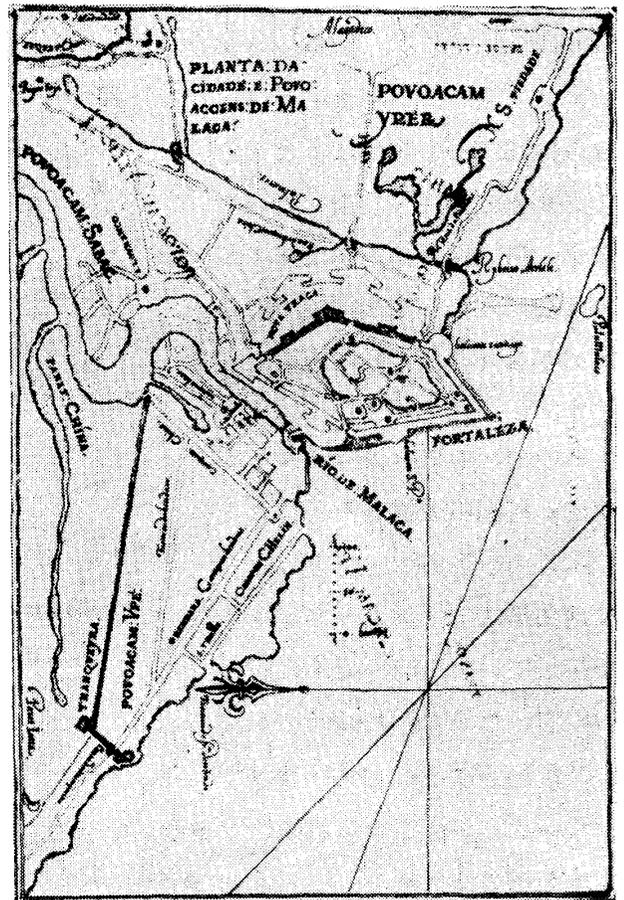


写真5 都市図目録4 Manuel Godinho de Erédia, “Planta da cidade e povoacoens de Malaca,” *Declaração de Malaca*, 1613, Bibliothèque Royale, Bruxelles.

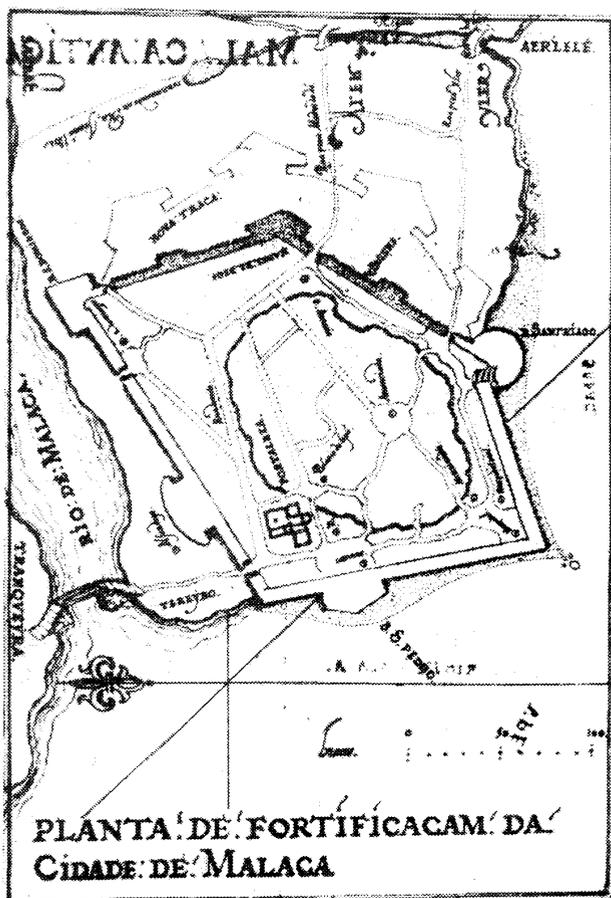


写真6 都市図目録6 Manuel Godinho de Erédia, “Planta de fortificacam da cidade Malaca,” *Declaraçam de Malaca*, 1613, Bibliothèqure Royale, Bruxelles.

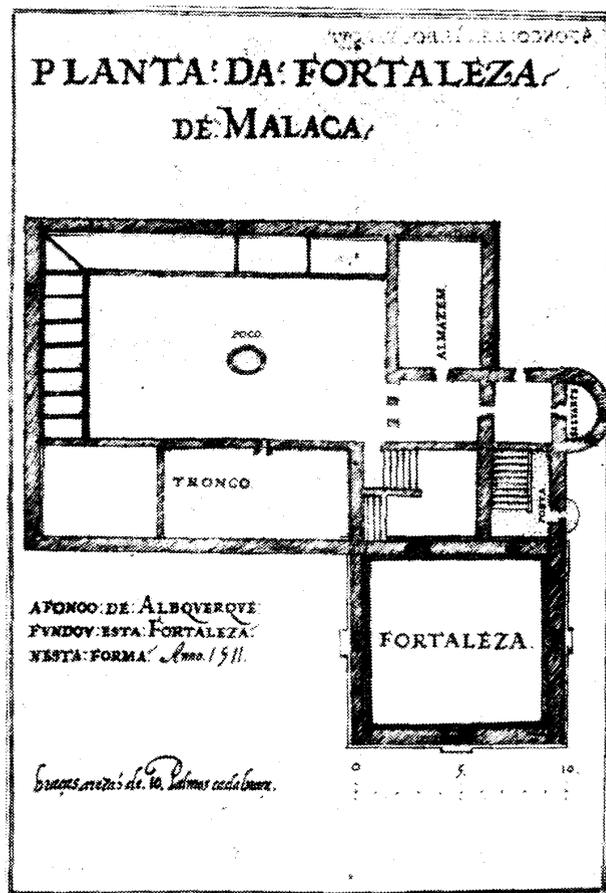


写真7 都市図目録7 Manuel Godinho de Erédia, “Planta da fortaleza de Malaca,” *Declaraçam de Malaca*, Bibliothèqure Royale, Bruxelles.

付加されている。前述の Gaspar Correia 作の目録1, 2図の建物の北西角に塔をもつものと異なっており, “Afonoo de Albquelque fundou esta fortaleza nesta forma, anno 1511” とあるので, この平面図のほうが正確な姿を伝えているものと判断される。なお, マラッカ占領直後, すなわち1512~15年の状況を示すといわれる Tomè Pires の *Suma Oriental* によると, この塔についてつぎのごとく記されている。

石と漆喰とがなかったので総司令官は材木で要塞を作りはじめた。そしてその間に漆喰を求める命令が発せられた。彼は材木の要塞を取り壊しはじめ, かれらの大メスキータ〔モスク〕の敷地に立派な要塞をつくった。それは現在もそこに位している。それは強固で, 周囲の塔の中に二つの真水の井戸があり, 他にも二つ三つある。一方の端では海がそばまで来ており, 他方は河に接している。要塞の壁は非常に厚い。見張塔は, それを見慣れている地域〔ヨーロッパ〕でもこのような〔立派な〕ものは見られない。それは5層で, そこから四方

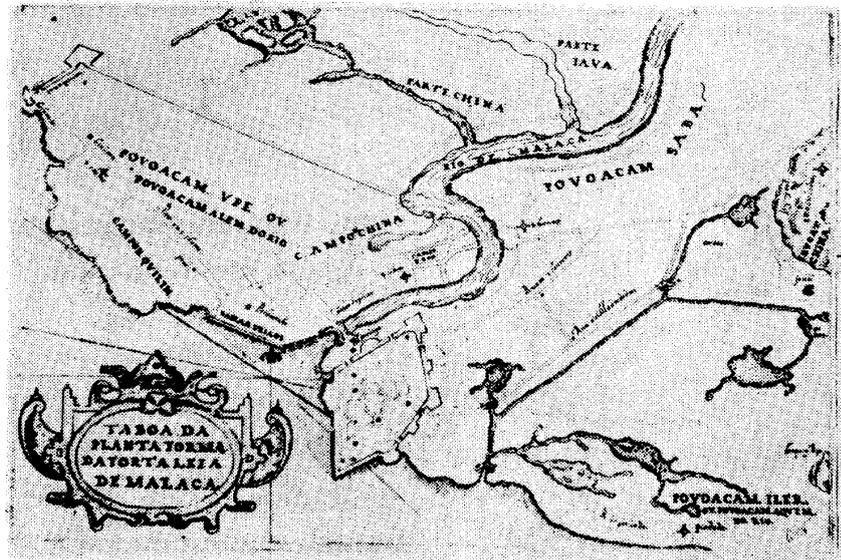


写真8 都市図目録8 Anon. — Manuel Godinho de Erédia, “Taboa da planta forma da fortaleza de Malaca,” *Atlas-Miscelânea*, ca. 1615–1622, collection of Dr. C. M. C. Machado Figueira, Lisboa.

に大小の砲が発射される。¹⁹⁾

まことに要塞としてはすぐれた機能性を有していたことを物語っている。Barros その他の記述によれば、マラッカには石材は乏しかったが、モスクや墓地を取り壊してこれらの材料が古要塞構築に利用されたともいわれている。

目録8 “Taboa da planta forma da fortaleza de Malaca” は目録4を簡略にしたものようであるが、方位のとり方は目録3に、内容は目録4に近く、南部の水系に若干の変更がみられる。南東部には Bukit China があらわれ、その北西に泉が描かれている。したがって、この図は Bukit China の泉、南部の水系と要塞との位置関係を図示したものと言ってよい。

目録9 “Fortaleza de Malaca” は城塞内部の鳥瞰図である。“聖母の丘”の寺院はじめ、古要塞・病院・市公館・Colegioなどが絵画的に表現されている。この城壁は四周ともに石造りの立派なものが描かれているが、St. Domingo 城砦と Santiago 城砦との間の障壁は、東側はすべてにわたり、南側は大部分にわたって木造であったとされるから、この鳥瞰図はこの木造部を石造とした一種の印象図といえるかもしれない。聖パウロ丘の寺院へ通じる四つの道路が克明に示されているのは何か要塞内部の道路——たとえば目録6のごときものがその基礎的な材料となっているのではないかと思われる。

〔Cグループ〕

目録10 “Malaca na Aurea Chersonesso” は João Teixeira の作で、簡単な要塞図である。

19) Armando Cortesão (translated), *The Suma Oriental of Tomé Pires, an account of the East from the Red Sea to Japan, written in Malacca and India in 1512–1515*, Vol. II, 1944, p. 281.

あるいはさらに詳細な鳥瞰図を志しながら途中で放棄してしまったのかもしれない。

目録11 “Fortalez de Malaca” はほとんど目録10のひきうつし、ただ少しばかり、右岸の市街が整理されているため、目録10に比べて整った印象を与える。

〔Dグループ〕

目録12 “無題マラッカ図写本” ただ一つがこの類に属する。1635～46年の写本

と推定される。²⁰⁾ すなわち、ポルトガル時代末期の要塞の鳥瞰図で、その第一印象は要塞・市街・周辺部の防禦が、従来どの図に比べてもいちじるしく強化されている。要塞の北東から南側にはかつてみたことのない溝渠があらわれており、聖フランシスコ丘 (Bukit China) にもブキットピピ (Bukit pipi) にも城砦が構築され、相互にバリケードでつながれている。これは



写真9 都市図目録9 Anon. — Manuel Godinho de Erédia, “Fortaleza de Malaca,” *Atlas-Miscelânea*, ca. 1615-1622, collection of Dr. C. M. C. Machado Figueira, Lisboa.

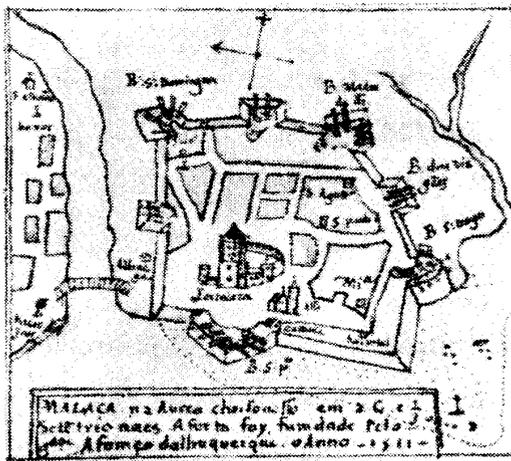


写真10 都市図目録10 João Teixeira, “Malaca na Auroa Chersonesso ……,” *Atlas de trinta e uma cartas*, 1630, Library of Congress, Washington.

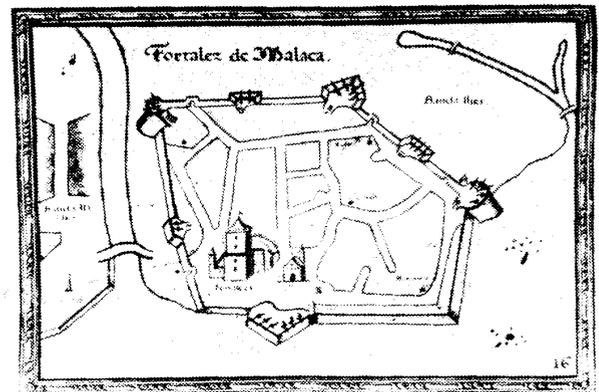


写真11 都市図目録11 João Teixeira, “Fortalez de Malaca,” *Atlas com vinte e três mapas*, 16c., Bayernische Staatsbibliothek, München.

20) C. R. Boxer, “The Achinese Attack on Malacca in 1629, as Described in Contemporary Portuguese Sources,” *Malayan and Indonesian studies*, 1964. の推定による。

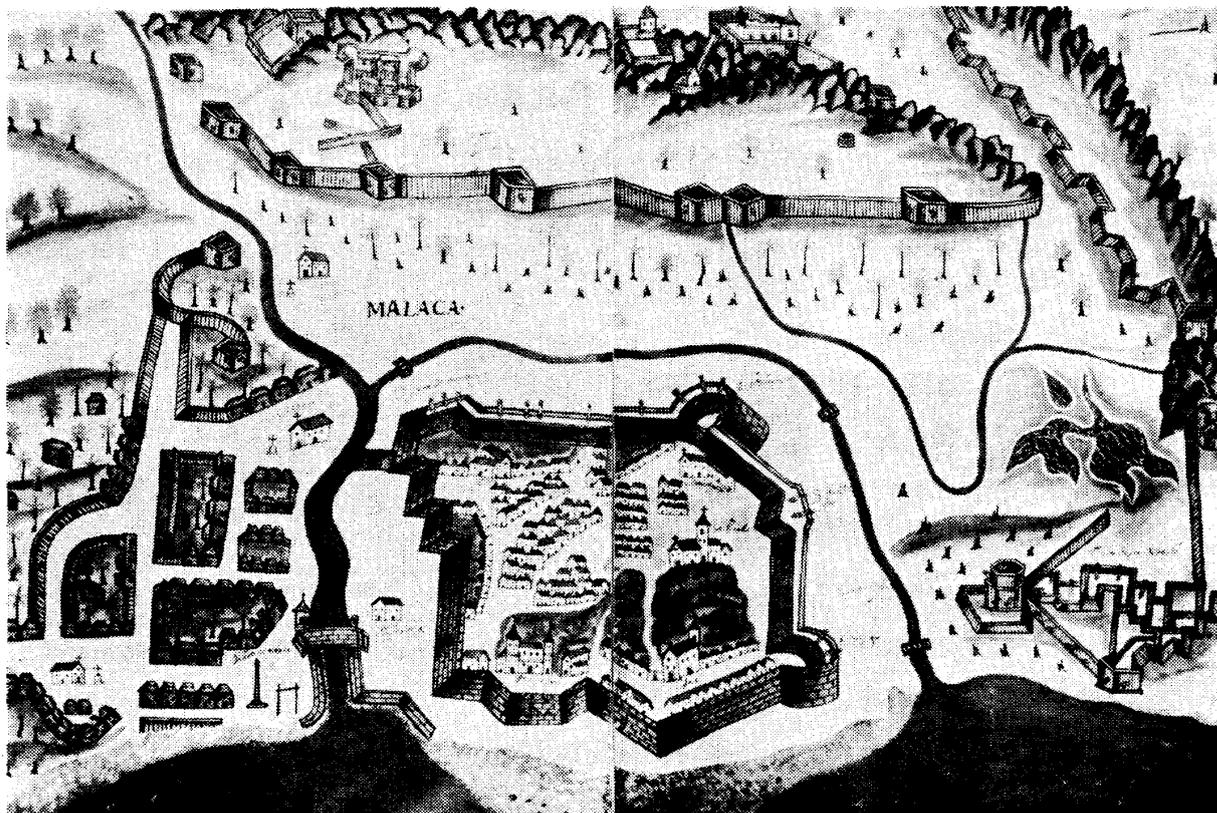


写真12 都市図目録12 Anon., no title, plan of Malacca, ms., *Livro do estado da India oriental*, ca. 1635-1646, British Museum, London.

アチャーをはじめとする周辺諸王との争いが激化したことと、オランダの進出に対応してかつてない強化されたマラッカの姿を現出している。

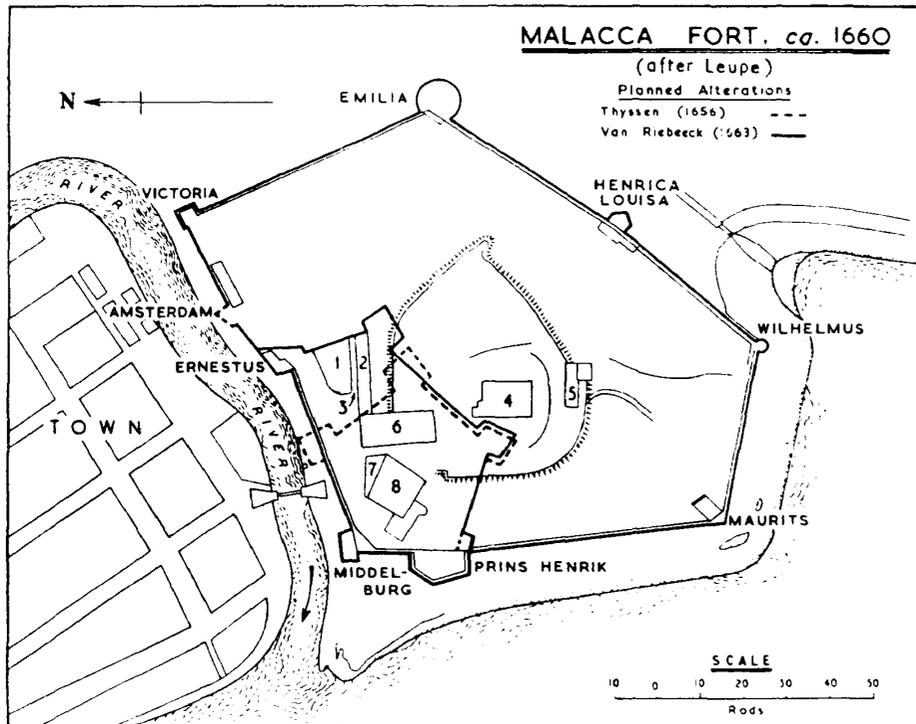
北東・南の溝渠は川および海に通じ、その幅は24フィートであったという。1620年頃のあるオランダの報告書によると、マラッカの衛戍兵は昼夜兼行で要塞の強化のために動員され、従来の木造の障壁も部分的に石造に変えられたという。²¹⁾ ポルトガル時代の要塞図はこれをもって終りとなる。

〔Eグループ〕

目録13 “Malakkas Grondteijckeningen” は P. A. Leupe が、ハーグの Rijksarchief にあるプランから、19世紀後半に復元作成した一図で、なかには Thysen (1656), Van Riebeeck (1663) の資料も小部分ふくまれている。²²⁾ だいたいにおいて、1660年前後の要塞内部の状況を示しており、要塞内部に、56年、63年の2度にわたって、主要建築物、旧城砦・政庁・銀行

21) G. Irwin, “Malacca Fort,” *Journal of Southeast Asian History*, Vol. 3, No. 2, 1962, p. 29.

22) *Ibid.*, p. 40, もと本題を “Malakkas Grondteijckeningen 1656 en 1663” という。もともと *Berigten van het Historisch Genootschap te Utrecht* (1859), p. 429 に所収される。この図はその後, “MacHacopian, Leupe: The Siege and Capture of Malacca from the Portuguese in 1640-1641,” *JMBRAS*, Vol. XIV, Part 1, 1936, にも reproduce されている。



1. Dwellings
2. Warehouses
3. Heerenstraat
4. Hospital
5. St. Paul's Church
6. Government house and secretariat
7. Pay office
8. Old fort (Misericordia)

写真13 都市図目録13 P. A. Leupe, "Malakkas Grondteijckeningen 1656 en 1663" (G. Irwin の複製図による)

などを囲む障壁がさらに築かれたようである。目録12と比較して、城壁は直線的である。これは前者が、印象的、絵画的であるのに比べて、後者がリアルに作図されたためかもしれない。

オランダの占領直後、古要塞は2階以上が完全に破壊され、ほとんど雨ざらしとなってしまったという。²³⁾ 1660年には、なおこの建物は修復されて残っていたようである。城壁で、もっともひどい損害を被ったのはマラッカ川河口から海に面する一帯で、この一角は大きく改変されて、二つの砦、Middelburg と Prins Henrik がつくられた。この地図の資料を提供したThysen もこの一つをつくった人物である。ポルトガルの反撃や周辺諸王の攻撃をおそれて、急速に修復され、そのための工人もバタビヤから送られてきた。弱点はカバーされ、木造の障壁は土壁にかえられた。城壁の高さはマラッカ川側で24フィート、他の場所では32フィートとなっていた。1641年11月7日壮重な儀式が行なわれ、オランダはマラッカを完全に支配することを宣言した。そして、城砦につけられていたかつてのポルトガル風の名称もほとんどつぎのようにオランダ風に改められた。²⁴⁾

S. Dominos → Victoria	Hospital dos pobres → Maurits
Madre de Deus → Emilia	S. Pedro → Prins Henrik
As Virgens → Henrica Louisa	Mora → Ernestus
Santiago → Wilhelmus	Hospital Real → Amsterdam

23) G. Irwin, *ibid.*, p. 32.

24) *Ibid.*, p. 33.

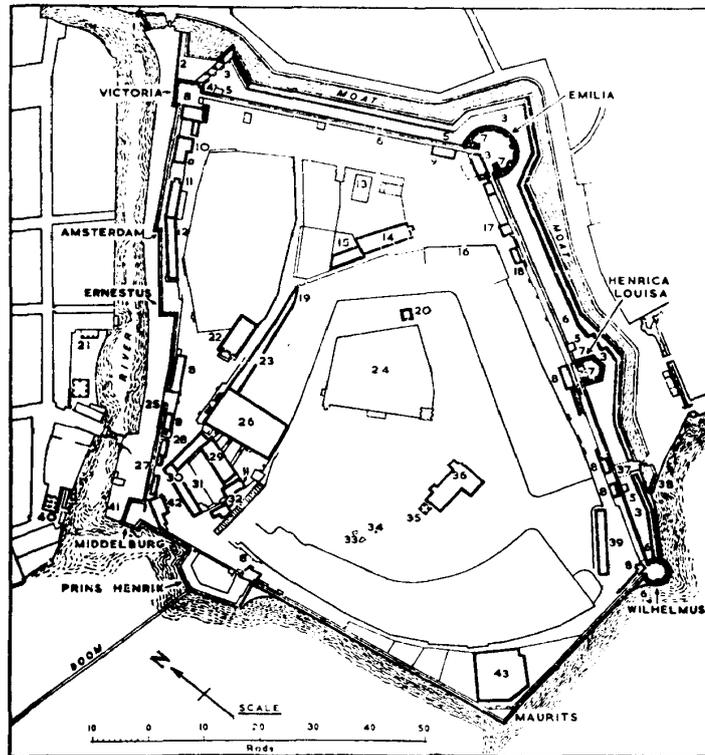


写真14 都市図目録14 P. Elias, "Hoofdplan van de stad en t kasteel Malacca," ca. 1792
(G. Irwin の複製図による)

- | | | |
|--|---|---|
| 1. Stone sluice-gate | 16. Cemetery | 32. Steps |
| 2. Traverse wall | 17. Company's stable and
coach-house | 33. Two stone
gun-platforms |
| 3. Fausse-braie | 18. Dispensary | 34. Flag-pole |
| 4. Gate to the fausse-
braie | 19. Warehouse and smithy | 35. Clock-tower |
| 5. Fausse-braie watch-
towers | 20. Grave of raja haji | 36. Powder magazine,
formerly St. Paul's
Church |
| 6. Gates always kept
closed | 21. Ships' timberyard | 37. Land gate |
| 7. Casemates | 22. Church | 38. Stone sluice-gate |
| 8. Guard houses | 23. Secretariat and
counting-house | 39. Gun store |
| 9. Military store | 24. Government garden | 40. Harbour-master |
| 10. Overseer of slaves | 25. Great gate | 41. Water-level |
| 11. Company's slave
quarters | 26. Government house | 42. Boatswain's house |
| 12. Arak store | 27. Riding gate | 43. Hospital |
| 13. Carpenter's store | 28. Armoury | |
| 14. Rice store | 29. Artificers and naval
guard | |
| 15. Pay office and
small-arms store | 30. Marine store and
cooper's store | |
| | 31. Gaoler | |

目録14 Hoofdplan van de stad en kasteel Malacca は C. F. Reimer の資料に基づく図である。²⁵⁾ 彼は中尉として1791年までマラッカに滞在した軍人であった。目録13の1660年から、この図作成の時期の間には有名な Barthasar Bort の長官時代 (1665-1678) がふくまれている。Bort の方針は、1) 北東角の Victoria 城砦の強化と、2) 南東部の濠のほり下げであった。1792年の Reimer の地図ではこの濠の北東のマラッカ川への出口、南東の海への出口には閘門が設けられ、潮の干満によってその水は清くされていた。マラッカ城塞はかくて、孤立した人工の島の様相を呈するに至った。要塞内部の建築物も完備され、18世紀末にはその防禦はほとんど完全で、不落と考えられていた。

目録15 “Dutch map of Malacca town” は、イギリスの第2次マラッカ占領100年を記念して、1924年シンガポールの Methodist Publishing House より出版され、マラッカの都市および要塞に関する史跡ガイドブックとして著名な *Town and Fort of Malacca* の付録としてオランダ時代の地図から複製されたもので、縮尺2,640分の1、左岸の要塞はもちろん、右岸の市街部までマラッカ川から海に通ずる水濠で囲まれ、市街の海岸部に石垣が築かれ、さらに防波堤を兼用したバリケードが海中に築かれている。この海中のバリケードはイリール沿岸にも構築された。市街地の記載に乏しいが、要塞都市としての完成期を示す地図である。18世紀末と推定される。

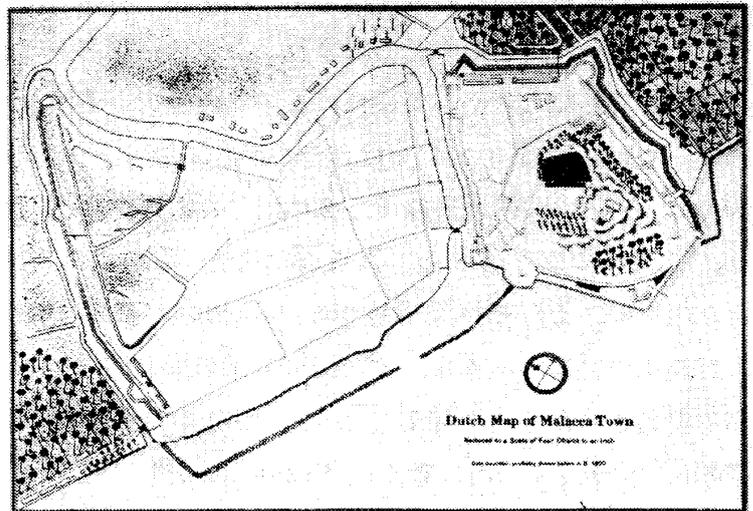


写真15 都市図目録15 Anon., “Dutch map of Malacca town,” before ca. 1800, reproduced in *The town and Malacca*, Singapore, 1924.

ではマラッカ要塞の原型となつたポルトガル時代中期以後のマラッカ要塞は、いったいどこの築城法をモデルとしたのだろうか。その方式は “Bastiond trace” に近く、銃砲をのせる防壁面を平坦にし、いずれの角度に対しても死角のないのを特色とした。それは1570～80年頃、イタリアの Verona で初めて実際に用いられ、以後、ヨーロッパ全体に広がっていったものである。この Verona 方式を実際にマラッカが模倣したとするならば、それは当時のヨーロッパの流行をいち早くとり入れたきわめてモダンなものであったといえるわけである。²⁶⁾

25) *Ibid.*, pp. 43 ff.

26) *Ibid.*, p. 26.

オランダの占領後はその河海に関する得意の土木技術を駆使して、この城塞と市街とを人工の島となし、主要な地点の防御工事を丹念に施した。このオランダの支配こそマラッカ要塞をその完成した姿にまで高めたのであった。

V マラッカ市街の記載

マラッカ市街は、要塞の北西、マラッカ川をへだてて右岸にひろがる。兩岸の連絡はマラッカ川河口に近い現在の金聲橋の位置に一橋が設けられ、この橋には両側に楼門が付せられていた。この橋はすでにマラッカ王国時代から存在しており、15世紀はじめ鄭和が訪れた頃からすでに外来の人士の注目を浴びていた。²⁷⁾ オランダ時代の絵画のあるものは、橋全体が屋根と壁とで覆われているものも存在する。しかし、18世紀末にはこの橋も鉄の吊橋に架け換えられていたらしい。それはともかく、目録1, 2の鳥瞰図 (ca. 1550~1564) はこの橋の姿をリアルに描いている。橋の近くにはポールが建てられ、北西に向かって広い道路が通じていた。そして、市街は木造の障壁で囲まれ、この道路が障壁に通じるところには、屋根を備えた一門が開かれて外部と連絡していた。この鳥瞰図をみる限り、市街の海に対する防禦は全く行なわれていない。目録3, 4では市街を囲む障壁は土壁に改められ、目録4には明らかに *tranqueyra* と記される。目録1, 2に同じく、橋から北西に通じる道路の出入口がつくられており、北東にのびる道路のつき当りの障壁にも出入口が設けられていた。目録3では市街の北西と南東に、それぞれ S. Thome, S. Esteuão の2教会が見出される。

目録4で注目すべきは、市街図に若干の地名が記入され、直交状の街路が描かれて、いちじろしく整備された印象を与えている。1610年頃の状況を示すこの図には海岸近くに *Campon Chelin*, マラッカ川河口近くに *Bazar Iaos*,²⁸⁾ これら二つの西には *Campon China*, *Campon Bendara*²⁹⁾ があり、障壁にそって、*Povoçam Upe* の地域が広がっていた。また障壁の外には *Parit China* とよばれる溝渠がつくられていた。*tranqueyra* の東端、*Campon China* からの道路との交点に *Porta dos Chincheos* がおかれていた。漳州あるいは泉州とよめる地名を付した門である。この市街の配置はすでにポルトガル統治下のマラッカが、多民族複合社会を構成していたことを示している。これらの民族のなかで、地図上から判断する限り、河口に近

27) J. J. Sheehan, "An Extract from Mr. John Nieuhoff's voyages and travels to the East Indies," *JMBRAS*, Vol. XII, Part 11, 1934, p. 72 は複数のアーチをもつ石造の橋であるといい、馮承鈞校注『瀛涯勝覽校注』上海, 1935, p. 23. によると、マラッカ王国時代は木橋で、20余間の橋亭が設けられ、そこで諸物の売買が行なわれたという。

28) J. V. Mills, "Eredia's description of Malacca, Meridional India, and Cathay," *JMBRAS*, Vol. VIII, Part 1, 1930, p. 104 によると "Chelin" は *Kling* のことで南インド出身の人々であり, "Iaos" は *Java* 人であるとする。

29) J. V. Mills の注は、マレー官人の名称で, "bendahara" は "Dato" の上に当たるといふ。また、マレー語 "店屋" "財宝" の意もあるといふ。

いジャワ人の市場、これを遡ったジャワ人の集落がもっとも通商に便利な場所を占めており、また、海岸通りの Chelin 人の集落がこれについていたと判断される。ジャワ人、南インド人が通商の主役をなし、中国人はこれにつぐ存在だったらしい。しかし、中国人も郊外に中国の名を冠する溝渠をつくって開拓に踏み出していたし、スジャラ・マラユ以来の伝説をもつ郊外の山も Bukit China の名でよばれるようになっており、その勢いはやはり侮りがたいものがあった。³⁰⁾

ポルトガル支配時代終末期を示す Resende 写本の都市図 (ca. 1638) では市街はきわめて整備されており (目録 12)、市街北部において複雑な障壁が築かれていたことがわかる。1800年以前とされるオランダ時代末期の地図では、さきののべた中国人の溝渠がさらに延長せられて、海に導かれ、マラッカ川から海までこの溝渠が貫通している。つまり、市街は要塞とともに、水濠に囲まれた防禦集落となり、また、海岸にも石垣が築かれ、さらに、海中には防波堤を兼ねた石のバリケードによって守られるようになった。この市街部は目録 9, 10の図では Banda Malacca とよばれていた。オランダの牧師で、17世紀末から18世紀初頭にかけて東インドに滞在し、数多くの旅行経験をかさねた C. Valentyn は、その著書のなかで、18世紀初頭のマラッカの要塞と市街について、つぎのごとく述べている。³¹⁾

街の西北側には小砦を備えた城壁がある。河もここから海に流れ込んでおり、その水は干潮時には淡水であるが、満潮時には鹹水となる。幅はたっぷり40歩はあり、流れはいついに非常に速い。この河はクリソラントと呼ばれる。街の東側には別の河がある。この河の向う側の土地一帯は、街のあるこちら側と同じ高さで、双方の間は木の橋がかかっている。しかし、その東南側は非常な湿地帯で、海岸沿いの多少高い細長い部分を除いてはモンスーンの雨の後水浸しになる。市中には見事な広々とした幾条かの街路が通じているが、舗装はされていない。街路には沢山の美しい石造の家が建ち並び、その大部分は前代のポルトガル風のはなはだ高い建物である。市街は三日月形に建設されている。

ここには立派な城壁と砦と砲とを備えた、優れた城寨があり、それは優秀な守備兵が守っているもので、激しい攻撃にもよく堪えるであろう。城寨の中にはことごとく昔のポルトガル時代の記念物となっている沢山のがんじょうな石造の家と整った街路とがあり、塔ははなはだ荒廃してはいるが、いまなおかなりの外形を存して丘の上に立っている。

街の中央の丘にあるその城寨はだいたいデルフスハーフェンと同じくらいで、門は二つあり、その一つは丘の上になっているが、他方は外側を海が洗っているのである。ここはいま長官や会社の役人の邸および守備兵の営舎であり、これはかなり堅固なものである。

30) スジャラ・マラユは Bukit China 方面に 5 井があり、その一つは1430年に華人の掘ったもので、清冽な水を出すことを述べている。

31) H. E. Müller, "Valentyn's description of Malacca," *JSBRAS*, No. 13, 1884, pp. 50-51.

200年前にはここは眇たる漁村にすぎなかったのであるが、今は立派な都市になっている。

要塞・市街ともに水濠と防壁に囲まれ、完成された美しい要塞都市マラッカの姿が眼前に髣髴するようである。

VI 住民と住居の概観

この要塞都市マラッカには要塞・市街をふくめて、どれほどの人口が収容されどの程度の家屋が存在していたのだろうか。本章では地図と密接に関連する都市の人口規模・内容構成、および家屋数・民族別所有者数などを検討しよう。ポルトガル・オランダ時代の人口に関する資料はきわめて乏しく、その正確な実態を把握するのに困難を感じさせる。

しかし、つぎに示す2資料はいく分なりともこの疑問に答えうるものと思う。

その第1は Erédia の *Declaração* の記述である。彼によれば、城内には家族もちのポルトガル人および守備隊300人があり、またカンポンクリン・カンポンチナの住民に2,500人のキリスト教徒があり、イリアルには土着民を除いて1,300人、サバク地区に1,400人、すべてこのマラッカ市街およびその周辺に約5,000~6,000くらいのキリスト教徒が居住していたことがわかる。³²⁾ ともかく、ジャワ・南インド・中国から来たアジア系諸民族を相手に熱心に宣教を行なって改宗させたものらしい。ポルトガル時代の地図に要塞・市内はもとより、郊外にまで教会の形を散見するのはこのような状況を反映するものに外ならない。要塞内および市街に2,800人のキリスト教徒があり、これに若干の非キリスト教徒を加えた数がマラッカ市の総人口だったことになる。郊外にキリスト教徒の多いことも意外の感が強い。

第2は、オランダ統治時代初期の長官 B. Bort 時代に行なわれた人口統計で、これによると、1678年、マラッカ市の人口は4,884人であったという。民族構成はオランダ人10%、ポルトガル人・黒人40%、中国人15%、ムーア人・ゲントゥス人16%、マレー人16%、ブギス人3%となっており³³⁾、文字通りの複合社会を形成していた。そして、10%のオランダ人の大部分がオランダ東印度会社に所属していたことはいうまでもない。(表1)

この調査はさらに家屋調査をも含んでいた。すべて720の建物のうち、137が煉瓦造り、583がアタップ葺きであった。そして、全人口の15%を占める中国人が、煉瓦造りの建物の59%を占めていたことは注目してよい。また中国人の家屋は61%が煉瓦造りの永久的な建築物だった

32) J. V. Mills, *op. cit.*, p. 20.

また、Valentyn は、マラッカの人口についてつぎのようにのべている。

「以前この城塞には11,000~12,000の住民がいたのであるが、現在ではオランダ人・ポルトガル人・マライ人を合わせて200~300より多くはない。その内マライ人は辺鄙な隅のほうに簡単なアタップ葺きの小屋を作って住んでいるのである。城塞の向う側にも沢山の美しい家々が建ち並び、また主としてマライ人が住んでいるきちんとしたココヤシやその他の植栽林がある。」と。

33) M. J. Brender (translated) and C. O. Blagden (noted), "Report of Governor Balthasar Bort on Malacca," *JMBRAS*, Vol. V, Part 1, 1927, pp. 41-44.

表1 Barthasar Bort によるマラッカ諸民族の人口構成 (1678年)

() 内は%, 上は種別において, 下はマラッカ諸族別において占める割合

民族 種別	オランダ人	ポルトガル 人・黒人	中 国 人	ムーア人・ ゲントゥス 人	マレー人	ブギス人	計
成人男子	34(7) (3)	358(18) (32)	127(18) (11)	372(48) (33)	198(26) (18)	38(31) (3)	1, 127(23) (100)
成人女子	53(11) (5)	562(28) (53)	140(20) (13)	100(13) (9)	188(25) (18)	24(19) (2)	1, 067(22) (100)
子 供	58(12) (5)	549(27) (51)	159(22) (15)	75(10) (7)	202(26) (18)	40(32) (4)	1, 083(22) (100)
奴 隸 (男)	143(29) (24)	212(10) (37)	93(13) (16)	35(5) (6)	87(11) (15)	14(11) (2)	584(12) (100)
奴 隸 (女)	130(26) (21)	234(12) (37)	137(19) (22)	51(7) (8)	71(9) (11)	9(7) (1)	632(13) (100)
奴 隸 (子供)	76(15) (19)	105(5) (27)	60(8) (15)	128(17) (33)	72(3) (6)	0(0) (0)	391(8) (100)
計	494(100) (10)	2, 020(100) (40)	716(100) (15)	761(100) (16)	768(100) (16)	125(100) (3)	4, 884(100) (100)

表2 Barthasar Bort によるマラッカ諸民族の建築物 (1678年)

() 内は%, 上は建築材料別, 下は民族別の割合

民族 建築 材料	オランダ人	ポルトガル 人・黒人	中 国 人	ムーア人・ ゲントゥス 人	マレー人	ブギス人	計
煉 瓦	23(18) (17)	6(3) (4)	81(61) (59)	27(46) (20)	0(0) (0)	0(0) (0)	137(19) (100)
アタップ	107(82) (18)	220(97) (38)	51(39) (9)	32(54) (5)	135(100) (23)	38(100) (7)	583(81) (100)
建築物計	130(100) (18)	226(100) (32)	132(100) (18)	59(100) (8)	135(100) (19)	38(100) (5)	720(100) (100)

のである。³⁴⁾(表2) Valentyn の記事のなかで「要塞の向うの美しい建物」というのがこれであろう。すでにこの頃現在みるがごとき、中国人によるマラッカ市街の形成はその基礎を固めつつあったものらしい。この調査の時期はのちに彼らの信仰の中心となり、カピタンの事務所の置かれた青雲亭の創建される5年前のことである。³⁵⁾ Victor Purcell によれば現在マラッカ在住の中国人家族はその祖先を17世紀始め頃まで遡ることは不可能であるという。³⁶⁾ これが、Erédia の述べるカンボンチナのキリスト教徒とどのようにつながるのか明らかでないが、ポルトガル・オランダのあの激戦を間に挟んで、この間における中国人の状況はなお詳細に知

34) *Ibid.*, p. 40.

35) 青雲亭内の碑亭に建立されている道光25年の石碑によれば、同亭は1673年、華人甲比丹鄭芳揚の創建になるという。観音廟で、甲比丹の事務所に利用された。現在 Bukit China の華人墓地や付属の寺廟若干を管理している。

36) V. Purcell, "Chinese Settlement in Malacca," *JMBRAS*, Vol. XX, Part 1, 1947, p. 122.

することはできない。しかし、現在の中国人家族のトレースがオランダ時代までしか遡りえないとすれば、ポルトガル時代の中国人は新天地を求めて移動あるいは四散したと考えねばならない。³⁷⁾ やはり、現在のマラッカ中国人街はオランダ時代にその基礎を形成したと言ってよいであろう。そして、18世紀初頭には、Valentyn もいうように「この街は商業上きわめて有利な位置にあり、この海峡にはつとに多くの出入船舶、ことにベンガル、コロマンデル、スラト、ペルシャ、セイロン、ジャワ、スマトラ、シャム、トンキン、シナから来る船舶が輻輳していた」のである。

む す び

マラッカ地名の広域地図上への出現は、中国においてはおそくとも15世紀初頭と目せられる。間接的ながら『武備志』所収の「鄭和航海図」はこれを推定せしめる資料ともなるし、また元代の朱思本の地図の改編とされる『広輿図』系の諸地図にも、この地名が記されているからである。だがヨーロッパにおいては事情は異なっており、広域地図にマラッカ地名の出現するのはほぼ1世紀おくれた16世紀初頭からのようである。マラッカ地名の出現のためには、アフリカが周航されねばならず、またインド航路の開拓もそのための必須の条件となったからである。そして、ヨーロッパ地図へのマラッカの出現後、10年を経ずして大航海時代の先頭に立った旗手ポルトガルの手によって占領されたのであった。かくて、インド以東の東アジアにおける最初のヨーロッパ植民都市がつくられたのであった。ただちに要塞と教会が建設され、その後、さらに16世紀の後半には当時最新の築城術による城壁によって囲まれた。おくれて東アジアに進出したオランダはポルトガルと大激戦を演じたのち、17世紀前半にこれを占領し、18世紀には得意の水利技術を生かして、環濠を伴うほとんど完璧の要塞都市を完成せしめた。一方、市街部は、交易都市としてのマラッカの性格を反映し、ジャワ人・中国人・タミル人などによる複合社会の形成が行なわれていたことが、古地図上の集落名称から看取せられ、重要なマラッカ市街の構成要素となっていた。イギリスのマレー半島への進出は18世紀後半、にわかには活発化し、1795年にマラッカを占領した後、1807年にオランダに還付、1824年にふたたびこれを手中にした。

マラッカ要塞都市の栄光は、なおその残照をイギリスの第一次占領期の終りまで保持されていた。しかし、1807年のオランダへの返還を前に、イギリス当局は他日もう一度これを占領する際のことを顧慮して、この都市の防禦態勢を解除した。まず Bukit China 方面の要塞の破壊からはじまり、塔と堡壘を有するポルトガル以来の歴史的な城塞は破壊しつくされた。これ

37) 宋哲美『馬來西亞華人史』香港、1964、p. 53.

には2年の歳月と数千ポンドの費用がついやされたといわれている。³⁸⁾ 破壊のあとに残されたおびただしい石材は早速セランゴールへ運ばれて道路舗装に用いられたという。³⁹⁾ ついにこの美しい黄金半島の都市もその残照を没し去ったのである。イギリスによるこの破壊はまことにマラッカの運命を象徴する出来事であった。すでにプリンス・オブ・ウェールズ島を占領し、商業基地となしていたイギリス東インド会社の政策はほとんどマラッカから交易機能を奪うに至っており、それにつづくシンガポール植民地の建設はその死命を制するものであった。

この落日のマラッカが、もう一度息をふきかえすには、19世紀末の中国人によるゴム栽培や錫鉱開発の盛行までまたねばならなかった。19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリス当局による華僑移住奨励策はやがて効を奏し、マラッカ市街はほとんど華僑の町と化し、華南や台湾の都市と何ら異なるところのない景観を現出せしめるに至ったのである。

〔補 説 1〕 マラッカ周辺地域を描く地図

マラッカの行政境域ないしはマラッカの周辺地帯を描く地図には、Erédia の *Declaração de Malaca* 所収図を中心とする一群の地図がある。以下に示す5葉の地図はこの4葉に、やはり、Erédia のマレー半島南部地図を加えたものである。

〔Malacca 地方図〕

1. Manuel Godinho de Erédia, “Nova Tavoia Geographica da Tera do Sertam de Malaca, Teita polo Cosmographo E Mathematico,” *Atlas de vinte folhas*, 1602, Biblioteca Nacional, Rio de Janeiro, 29.7×39.3 cm. (411 B*)
2. Manuel Godinho de Erédia, no title, map of Malacca district, *Declaração de Malaca*, 1613, Bibliothèqne Royale, Bruxelles, 26.0×36.5 cm. (412 E*)
3. Anon.—Manuel Godinho de Erédia, no title, map of Malacca district, *Atlas-Miscelânea*, ca. 1615-1622, collection of Dr. C. M. C. Machado Figueira, Lisboa, 27.5×20.0 cm. (417 C*)
4. Manuel Godinho de Erédia, no title, map of Malacca district, reproduced by J. V. Mills, “Eredia’s description of Malacca, Meridional India, and Cathay,” *JMBRAS*, Vol. VIII, Plate, I, 1930.
5. Anon.—Manuel Godinho de Erédia, no title, map of southern part of Malay Archipelago, *Atlas-Miscelânea*, ca. 1615-1622, collection of Dr. C. M. C. Machado Figueira, Lisboa, 27.5×20.0 cm. (417 A*)

* *Portogaliae Monumenta Cartographica (P.M.C.)*, plate number.

これ等は *Declaração* の第2節にある“マラッカ地域について”の内容に対応するもので、マラッカを中心に、海岸一帯については北の Panagim 川河口から Muar 川河口に至る12リーグの範囲にわたり、内陸地帯では北方から東北方にかけて、半径8リーグの弧によって囲まれる地帯がふくまれている。(J. V. Mills, “Eredia’s description of Malacca, Meridional India, and Cathay,” *JMBRAS*, Vol. VIII,

38) A. Hill (edited and translated), “The Hikayat Abdullah,” *JMBRAS*, Vol. XXVIII Part 3, 1955, pp. 62-63.

Munshi Abdullah, 劉強訳「馬六甲砲台之折毀」『南洋学報』第9巻第2輯, 1953, pp. 26-27.

39) R. O. Winstedt, *op. cit.*, p. 8.

Part 1. p. 104, 1930.) ただ、地方図目録 2, 3, 4 (3の複製図) はほぼ同様の所収範囲を有するが、地方図目録 1 は、Muar 川中流を欠いている点、わずかばかり異なっている。これらの図はいずれも内陸部では脊梁山脈の西側に境界線が描かれ、Sunecopon, Nanny などの集落をふくむ。この図中に示される地名および準地名は 103 項を数え、集落と交通の様相が克明に記される。

交通路で注目されるのは、マラッカ川を遡り、Muar 川の上流に達し、ここからさらに Pam 川に連絡して半島東海岸のパハンに連絡するルートが記されることである。いわゆる“Panarican”ルート (P. Wheatley, “Panarican,” *Journal of the Southseas Society*, Vol. X, Part 1, 1954—*Golden Khersonese*, Kuala Lumpur, 1966) であって、その分水嶺付近には Muar 川上流と Pam 川上流の連絡点“Panarican”の地名が付せられている。もちろん、通常いわれるごとき、Muar 川下流から遡行して Pam 川 (Pahang 川) 上流に至る本来の“Panarican”ルートは存在していたのであろうが、ここではマラッカ川遡行ないしは、Muar 川中流より上流經由交通路しか記されていない。すなわち、マラッカからパハンへの横断路を中心に描いたものと考えられるのである。絵画的な中央山脈や、Guno Ledan Mont などいちじるしく注意を惹く描き方で、縮尺は記されていないが、J. V. Mills によると、*Declaracão* に記される距離と実距離とを比べるとだいたいにおいて 20% 程度の誤差があることが知られている。(J. V. Mills, *ibid.*, p. 108) この類の地図は Malacca District を一望のもとに概観し、内部における交通系統と、外界への交通連絡を明らかにすることを主眼としている。

地方図目録 5 は現在のマラヤ全域を記し、それにいまタイ領となっている Patani 付近までがふくまれる。すなわち、Kedah—Patani を結ぶ線から、Johol, Singapore までを描き、とくに東西両斜面を流れる主要河川および横断路、縦断路が記入される。Panarican ルートは Pera 川上流より Pam 川へ直接通じるものが一つ、さらにもう一つ Pera 川上流より、Muar 川上流経由、Pam 川へ入るものが描かれている。地名・交通路の記載からみて、マラッカ要塞都市とマラヤ全域の関係を把握するためのものである。

〔補 説 2〕 “Hamy 図” を 1502 年頃の作成とする根拠について

注 12 にあげた Dr. E. T. Hamy, “Notice sur une mappemonde portugaise anonyme de 1502, récemment découverte à Londres,” *Bulletin de géographie historique et descriptive* 1886, Comité des travaux historique et scientifiques, 1887, は筆者の手許で得られないため、在パリの高橋正氏を煩わして、同地の国立図書館において重要な点を調査していただいた。以下要点を摘記すると、同論文 158 ページに「この図の作者 (anonyme) は 1501 年 8 月に帰ってきた Toar によって、ソフェラに関する情報をその地図に示すことができたが、1502 年 9 月 11 日にインドから帰ってきた Joam de Nova による詳しい事実の記述を全く欠いている。これによって彼の仕事がこの二つの日付の間に属することがわかる」とある。

〔補 説 3〕 マラッカ山上の教堂について

本文中に記した Bukit Malacca の名称の変化とともに、マラッカ山上の教堂創基の事情も錯綜している。中村孝志教授の示教によれば、この丘の上に小教堂が建てられたのは 1521 年で、これは Duarte Coelho が 1519 年中国沿岸での危難を免れた恩寵を感謝して建立した Nossa Senhora da Graça (または Nossa Senhora do Outeiro) に始まる。これはその後、聖母受胎告知教会 (Nossa Senhora da Annuncian) と改名され、16 世紀中頃、ほとんど廃寺に近い状態であったのを修理したが、1590 年までには完了しなかったという。そして、オランダ時代、この丘の上に聖パウロ学林が設けられたので、丘を聖パウロの丘、寺院を聖パウロ寺院と呼ぶようになった。

ポルトガル時代、この地の寺院は東方伝道の基地としてきわめて重要であった。すなわち、1511 年、アルブケルケが最初山麓に聖母受胎告知教会と命名された一寺院をつくり、これが後に“昇天の聖母教会”と改称され、新設されたマラッカ教区司教座の祭堂となり、東方伝道の拠点とされたのである。Leupe (スハウテンの報告) は“聖マルチル会堂”と記している (MacHacopian, p. 89)。このように名称が時代と共に変化し、近接の 2 教会の名称も時代によって同名ながら異なるわけで、まことに面倒な次第であるという。(Cf. F. J. Moorhead, *A history of Malaya and her neighbours*, Vol. 1, 1959, pp. 183-189.)